

地域連携

地域連携の現状について
P.8で解説

学校と地域、そして学校同士がつながり、 各校が教育活動を充実させる HAMADA教育魅力化コンソーシアム

島根県浜田市は、「浜田の未来びと」である高校生の地域協働活動をサポートし、未来につながる持続的な地域力の向上を実現するための共同事業体、「HAMADA教育魅力化コンソーシアム」を運営。探究学習や課題研究、地域ボランティアなどについて、学校・生徒と地域のニーズをマッチングさせ、教育活動の充実に寄与している。

市内5つの県立学校を軸に、 地域が協働体制を構築

島根県は、県立高校の魅力化を進めるにあたり、小・中学校、地域、市町村、大学、社会教育機関、企業などが参画し、魅力ある高校づくりに取り組む協働体制「高校魅力化コンソーシアム」を、2022年度までにすべての高校において構築した。過疎化・少子化が進む中、高校を核として持続可能な地域を創生しながら、社会に開かれた教育課程の実現により、地域の中で未来を生き抜く力を高校生に育むことを目指している。

田高校、同県立浜田商業高校、同県立浜田水産高校、そして同県立浜田養護学校、同県立浜田ろう学校の5校を軸に構築されたのが、浜田市を事務局とした「HAMADA教育魅力化コンソーシアム」だ。

HAMADA教育魅力化コンソーシアムでは、「高校生一人ひとりの魅力や個性を伸ばし、自『実現を支援する』」「魅力ある協働活動について、学校と地域双方からの情報を発信する」「地域・企業が高校生とつながり、地域課題に向き合う高校生を支援する」など、重点的な取り組み事項を掲げている。それらはコンソーシアムに属する5校の課題を踏まえて整理されたものだ。

浜田商業高校の中澤雅美校長は、「それぞれに特色を持つ県立学校が、地域



田邊賢一
たなべ けんいち
同校に赴任して2年目。



佐々木健二
ささき けんじ
同校に赴任して3年目。



中澤雅美
なかざわ まさみ
同校に赴任して1年目。



作野健一
さくの けんいち
同校に赴任して4年目。国語科。



大地本由佳
おおちもと ゆか
2019年度から現職。



熊谷修山
くまがい おさま
2022年度から現職。



真鍋翔
まなべ しゅう
同校に赴任して6年目。

図1 HAMADA 教育魅力化コンソーシアムが支援する活動例

■ 浜田高校「ちょこつ・トーク」



高校生とほぼ同数の地域住民が1対1で向かい合い、指定されたテーマについて1分ずつ考えを述べる。次々に相手を変えて、たくさんの人と出会う仕組み。

■ 浜田商業高校「浜商デパート」



高校魅力化の取り組みの一環として実施する大規模販売実習では、地元企業との連携、地域住民への広報で、魅力化コーディネーターと連携した。

■ 浜田水産高校「出前授業」



小・中学生に、浜田市の水産資源や食文化について関心を持ってもらうために、同校の生徒が講師になって漁業の現状などをテーマにした出前授業を行っている。

■ 探究活動Y.A.C. (ヤック)



生徒たちが学校を超えて協力し、地域活性化イベントを企画・実施する、HAMADA 教育魅力化コンソーシアム主催の地域系部活動。

と協働しながら地域の魅力を生徒に伝え、浜田市を愛する人材に育てることは、若年層の県外流出が進む地域の課題であり、学校の課題だ」と説明する。「子どもの数が少なくなる中、仮に進学や就職などで浜田市を離れても、何らかの形で浜田市にかかわる『関係人口』を増やすことが、今後ますます求められる。それは、この地域の未来の担い手の育成だけでなく、浜田市

の生徒たちの学びを豊かにすることにもつながります」

地域とつながることで、教育活動が豊かになる

HAMADA 教育魅力化コンソーシアムには、浜田市教育委員会の職員2人が魅力化コーディネーターとして配置されている。魅力化コーディネーター

は、生徒が探究学習において地域や地元企業と連携するといった、学校から地域に対する要望、あるいは生徒に地域行事などへのボランティアに参加してほしいといった、地域から学校に対する要望など、地域と学校がつながる際の窓口を一括して担っている。

各校は魅力化コーディネーターと連携して、自校の教育活動の質的向上を図っている。浜田高校では、1年生が地域住民と自分自身や地域の課題について語り合う「ちょこつ・トーク」を実施している(図1)が、同活動には1年生の人数とほぼ同数の約160人の住民が参加した。それだけの数の住民の参加が実現したのは、高校を活動拠点として学校と地域をつなぐ魅力化コーディネーターが広く地域に声をかけてくれたからだ。浜田高校の作野健一先生は語る。

「高校生にとって、家族や教師以外の知らない大人と話をする機会は、決して多くはありません。多様な年齢、職業の大人と語り合えたことは、自分自身や地域に対する理解につながったはず」

魅力化コーディネーターの熊谷修山さんも、「高校生にとって、地域に飛び出していく準備ができた」と手応えを語る。

島根県立浜田高校 学校概要

設立 1893 (明治26) 年
形態 全日制・定時制・通信制/普通科、理数科/共学
生徒数 (全日制) 1 学年約200人

2023年度卒業生進路実績 (全日制) 国公立大は、京都大、広島大、九州大などに88人が合格。私立大は、早稲田大、同志社大、立命館大、関西大、関西学院大などに延べ140人が合格。

島根県立浜田商業高校 学校概要

設立 1965 (昭和40) 年
形態 全日制/商業科、情報処理科/共学
生徒数 1 学年約80人

2023年度卒業生進路実績 4 年制大は、島根県立大、広島経済大、広島工業大、福岡大に延べ4人が合格。短大・専門学校進学27人。就職28人。

島根県立浜田水産高校 学校概要

設立 1948 (昭和23) 年
形態 全日制/海洋技術科、食品流通科/共学
生徒数 1 学年約80人

2023年度卒業生進路実績 短大・専門学校進学13人。就職25人。

「これほどいろいろな年齢、職業の大人と話したのは初めてです」と興奮気味に話す生徒を見て、生徒の目が地域に対して開かれたことを感じました。今後の地域をテーマとした探究学習にもよい影響をもたらすはず」

浜田水産高校も、「GAIN (スイスイ) トーク」と名づけた、1年生と住民との語り合いの場を、魅力化コーディネーターと連携して開催している。

生徒の学びの機会をどう保障するか？

図2 地域協働活動マッチングシート



● マッチングシートでイベントのボランティアを募集した団体から、参加した高校生に届いたお礼のコメント「接客マニュアルもなく、想像以上の来場者に大人も混乱する中、高校生の皆さんがいなかったら、イベントは成功していませんでした。感謝しています。当イベントが浜田市の代表的なイベントとなるよう、努力していきます。大人になった時は、ぜひ実行委員の一員として、当イベントを引き継いでほしいと思っています」

「参加した住民の方から、『高校生が自分の言葉で伝えてくれた水産高校の魅力を知り、この学校はこれからは地域に必要なだと確信した』といった感想をいただきました」(浜田水産高校・佐々木健一教頭)

浜田市では、子どもたちに、水産資源や食文化、産業について、もっと関心を持ってほしい」という漁業関係者の思いから、市内の小・中学校の給食に「ノドグロ」を毎年提供しており、浜田水産高校の生徒は、4000尾を超える数のノドグロの下処理を担っている。地域と、深い学びを実現したいという学校の思いが重なった取り組みの1つだ。

「ノドグロを処理して給食センター

に納めるまで、生徒はいろいろな職種の人と協働します。水産資源が食品として市場に流通するまでのプロセスを、地域の中で学ぶことができている」(浜田水産高校・真鍋翔先生)

「さらに本校では、小・中学校に出向き、高校生が講師になって漁業の現状などをテーマにした出前授業を行っています(図1)。ノドグロ給食を始め、高校で得た知識や技術を地域の大人や子どもに披露する場合は、生徒にとっても自己肯定感を高める機会となっております」(浜田水産高校・田邊賢一先生)

魅力化コーディネーターの大地本佳さんは、「人口が少ない町だからこそ、人と人の出会いは大きな可能性を持っている」と語る。

「生徒が出会った大人は、探究学習や課題研究における身近な伴走役の候補の1人になります。生徒と地域の大人の関係性が持続しやすいのは、小さな町のメリットです」

高校生の学びを支えるための勉強会を地域で開催

HAMADA教育魅力化コンソーシアムが主催する探究活動「A.C.(ヤック)」(図1)は、コンソーシアム内の生徒が任意で参加する地域系部活動だ。生徒は、地域住民から町の課題を聞くなど、フィールドワークを行い、地域の問題の解決プランを考えながら、地域と自分の未来を考える。

「高校生の探究学習に伴走するにあたって、地域の人たちにも、探究学習について理解してもらうことが必要です。そこで、『教育魅力化勉強会』を定期的に開催し、探究学習を軸にした高校と地域の連携の意義などについて学び、高校生と一緒に取り組みたいことを話し合っています」(大地本さん)

そうした学校を超えた協働を経て、生徒たちは様々な挑戦を始めている。例えば、浜田商業高校の郷土芸能部が舞う「石見神楽」の口上を浜田高校の生徒が英訳して、上演中に音声で流す

とともに、浜田水産高校の生徒が「アッコウの唐揚げ」を観客に振る舞うというコラボレーションが実現した。

高校生の参加・参画を希望する地元企業や団体が、生徒に活動内容を伝える「地域協働活動マッチングシート」(図2)の利用も活発だ。これまでは教頭などの管理職が窓口となり、地域からの依頼文書などを整理・管理していたが、現在は魅力化コーディネーターが依頼内容を精査したマッチングシートを、オンライン上で生徒が自由に閲覧できるようにしている。そうした仕組みをつくったことで、学校側の業務負担が激減したと、各校の教師は異口同音に言う。また、生徒が直接、魅力化コーディネーターに対して、「こんな活動をしたい」と、企業・団体への仲介を求めるケースも増えている。

「学校と地域が『こういう生徒を育てたい』『こういう町をつくりたい』といった思いを共有することによって初めて、大人たちが市と県という違いを超えて、高校生の育成にかかわる」とする土壌が生まれるのだと思えます。人口が減少し、生徒の数も減っていく時代だからこそ、学校と地域が互いの強みを生かしながら、未来の人材を育てていくことが必要だと思っています」(大地本さん)